

高岡市埋蔵文化財調査概報 第51冊

小竹藪遺跡 調査概報

—— 高岡古城公園の整備にともなう試掘調査 ——

2003年3月

高岡市教育委員会

高岡市埋蔵文化財調査概報 第51冊

小竹藪遺跡 調査概報

—— 高岡古城公園の整備にともなう試掘調査 ——

2003年3月

高岡市教育委員会



卷首図版 101. 小竹藪遺跡出土の縄文土器（一部抜粹）



卷首図版 102. 小竹藪遺跡出土の石器（一部抜粹）



卷首図版 103. 第1トレンチ土層断面
(黒色土は縄文土器の包含層、その上層では高岡城築城時の整地層が検出された。)



卷首図版 104. 遺跡遠景

序

小竹藪遺跡は、高岡古城公園の敷地内に所在する遺跡です。この地は、江戸時代の初頭に高岡城が造営された地としてひろく知られておりますが、縄文時代の遺跡が所在する地としても、研究者間において注目をされてまいりました。

平成4年において、同地を公園施設として整備すべく計画がなされましたが、これにともない、地下に所在する埋蔵文化財にも何らかの影響を及ぼす可能性が生じたため、試掘調査を実施いたしました。

調査の結果、縄文土器をはじめとする多量の遺物が出土し、当該地においては遙か太古の昔から、先人たちが日々の生活を送っていたことが改めて確認されました。

今回出土した土器群は、当地方の縄文時代中期から後期の土器を研究するうえでも、有意義な資料になると思われます。したがいまして、本書につきましては、郷土の歴史の解明や学術研究等をする際にも、お役に立てていただけるものと考えている次第です。

末尾になりましたが、この調査にご協力をいただきました、関係各位に対し、感謝の意を表します。

平成15年3月

高岡市教育委員会

教育長 細呂木 六良

例 言

- 本書は、富山県高岡市における縄文文化財の発掘調査概報である。
- 本書は、高岡古城公園における公園施設の整備にともなう、小竹城遺跡の発掘調査概報である。
- 屋外調査は、平成4年に高岡市教育委員会社会教育課が行い、報告書作成業務は同課から分化した文化財課が平成14年度に実施した。
- 屋外調査にかかる関係者は、次のとおりである。

【社会教育課】

課長： 野村 一郎
係長： 大石 茂
課員： 山口 長・ 横和代

- 報告書作成業にかかる関係者は、次のとおりである。

【文化財課】

課長： 大石 茂
課長補佐： 天谷 隆夫
課員： 根岸 明義 荒井 隆 太田 浩司

- 現地調査及び報告書の作成にあたっては、次の各氏から指導や協力を得た。(五十音順・敬称略)

小島 俊彰 林守 敏州 西井 龍儀 古岡 知明 古川 知明 堀井 泰樹 那木 類容

- 本書の作成にかかる参加者は次のとおりである。(五十音順・敬称略)

池田 正美 岡田 広 梶谷 潤 勝井 雄子 小島 あゆみ 小林 央 新谷 晴紀子
田中 美穂子 遠谷 美奈子 中 三希子 中田 郁子 橋 真理子 原井 美紀 村川 智恵子
寧崎 真弓 山崎 美和 木田 枝里子

目 次

序 説	1
出土遺物（縄文時代）	5
まとめ	16

挿図及び表

図1. 遺跡周辺図	図2. 高岡城古図
図3. 弥生時代後期から古墳時代前葉の土器	図4. トレンチ配置図
図5. 縄文土器光沢図(1) 縄文中期後葉	図6. 縄文土器実測図(2) 縄文中期後葉～後期初頭
図7. 縄文土器実測図(3) 縄文後期前葉	図8. 縄文土器実測図(4) 縄文後期前葉
図9. 縄文土器光沢図(5) 縄文後期中頃はか	図10. 石器実測図
表1. 縄文土器検査表	

巻首図版

巻首図版101. 小竹城遺跡出土の縄文土器	巻首図版102. 小竹城遺跡出土の石器
巻首図版103. 第1トレンチ上層断面	巻首図版104. 遺跡遠景

図 版

図版201. 第1トレンチ土層断面	図版202. 第1トレンチ土層断面（中央部）
図版203. 第9トレンチ土層断面	図版204. 第9トレンチ土層断面（山東側最先端）
図版301. 縄文土器（中期後葉）	図版302. 縄文土器（中期後葉）
図版303. 縄文土器（中期後葉）	図版304. 縄文土器（中期後葉）
図版305. 縄文土器（中期後葉）	図版306. 縄文土器（中期後葉）
図版307. 縄文土器（中後葉～後期初頭）	図版308. 縄文土器（後期前葉）
図版309. 縄文土器（後期前葉）	図版310. 縄文土器（後期前葉）
図版311. 縄文土器（後期前葉）	図版312. 縄文土器（後期前葉）
図版313. 縄文土器（後期前葉）	図版314. 縄文土器（後期前葉）
図版315. 縄文土器（後期前葉～中頃）	図版316. 縄文土器（後期中頃）
図版317. 打製石斧・磨製石斧	図版318. 磨石又は敲石・凹石
図版319. 石錘・石椎	図版320. 弓生土器・土師器
図版401. 遺物出土状況（3003）	図版402. 遺物出土状況（3007）
図版403. 遺物出土状況（3015）	図版404. 調査風景
図版405. 調査風景	図版406. 調査風景

序　　説

遺跡周辺の歴史的環境

小竹藪遺跡は、縄文時代においては中期後葉から後期後葉頃まで存続したものと考えられる遺跡である。同地には、高岡城の築城をはじめとする後世の開発行為が介在するため、現況から縄文時代の景観を復元することは困難であるが、図2等を参照するならば、小竹藪遺跡の包蔵地として周知されている部分（図中の「御城外」とある部分）は、近世においても現在のような台地状の地形を呈していたと考えられる。

小竹藪遺跡から北東へ400mほど離れた地には、中川遺跡が所在する。この遺跡については、小竹藪遺跡よりも後の時期、すなわち縄文晩期を中心とする遺跡であることが把握されている。したがって、高岡古城公園を含



図1. 遺跡周辺図 (高岡市都市計画地図 1/5,000 一部加筆)

む高岡台地の周辺には、時代の推移とともに生活拠点を変更することはあっても、大局的には広範囲かつ長期にわたって縄文時代の様相が繰り広げられていた可能性があるかと思われる。

なお、上記した二つの遺跡は発掘調査があり行われておらず、また、その調査範囲も比較的小さなものがほとんどであったことから、現状では、その具体相を明らかにするまでにはいたっていない。

小竹藪遺跡をめぐる研究小史

当遺跡の発見は、昭和28年（1953）に池之端から小竹藪にむかう切通しの断面から縄文土器が採集されたことによるが、本格的な研究の始まりは、これを受けて行われた「高岡文化財保存会」の発掘調査によると言えるであろう。

ちなみに、このときの調査区は僅か7.5m²ほどの規模でしかなかったが、多量の遺物が出上り、当地の歴史をひもとくうえでは、大きな成果をあげることとなった。

なお、この調査については、小島俊彰氏を受け継がれ、昭和39年（1964）における『高岡公園小竹藪縄文遺跡』の刊行をもって、ひろく世に知られるところとなっている。

その後は、昭和56年（1981）の緊急調査や、平成3年から4年（1991～92）にかけて行われた試掘調査が散見されるにとどまる。このときの調査概要については、『高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅱ』などにおいても簡潔に述べられているが、平成4年の試掘調査では、縄文土器の他にも、古墳時代の土師器などが検出され、これによって小竹藪遺跡が3時代にまたがる複合遺跡であることが明らかとなった。

なお、小竹藪遺跡の包蔵地からは外れるものの、高岡古城公園の敷地内及びその周辺においては、小規模ながらも発掘調査が行われており、平成7年（1995）には高岡城遺跡の「三の丸茶屋地区」等が、続く平成9年（1997）には中川遺跡が調査されている。いずれも小竹藪遺跡と同様に縄文土器や石器などが検出され、この近隣に縄文時代の様相がひろがっていることが改めて確認されている。

本書においては、平成4年に実施した高岡古城公園内における小竹藪広場周辺の整備にともなう、試掘調査の概要を報告することとする。

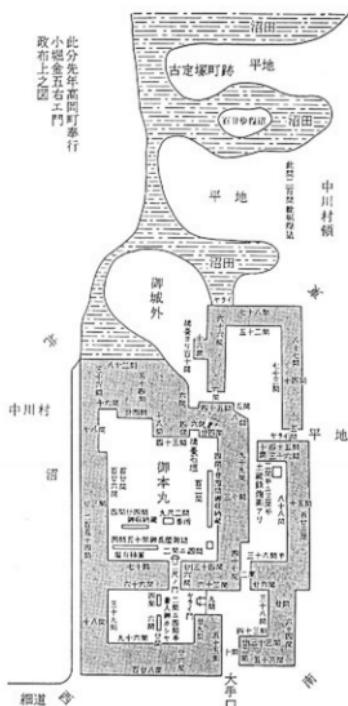


図2. 高岡城古図

金沢市立玉川図書館・近世資料館所蔵図を参考
高岡市教育委員会「高岡城遺跡調査概報」1997より転載

調査区概観

平成4年度の試掘調査は、高岡古城公園の北部に位置する「小竹藪広場」とその近隣で行われた。調査方法としては、大小14本の試掘坑（以下、「トレンチ」と呼ぶこととする。）を設け、総面積718m²を掘削した。各トレンチの配置については図4にしめしたが、現地表面から最大75cm前後を掘削したところで縄文時代の遺物を包含する土層を確認した。

なお、この上層の上位には、慶長14年（1609）に高岡城を築城したときのものとみられる整地土層が確認されており、調査件数のすくない同域にあっては、貴重な資料を提供することとなっている。

高岡城の築城時における整地土層（巻首図版103等参照）

今回の調査では標記の上層ないし遺構を確認している。この土層は、橙色粘質土や灰褐色粘質土、あるいは暗黄褐色粘質土や腐葉などを人為的に堆積させたものであるが、小島俊彰氏の指摘するように、漆を掘削する際に生じた上をこの地に盛土した可能性もあるかと思われる。ちなみに、当調査区においてこの土層が検出されたのは第1トレンチや第9トレンチなどである。

なお、近隣に位置する高岡城遺跡「送水管地区」や同「三の丸茶屋地区」などでも、このような土層が確認されており、高岡城の築城時においては、こうした整地が各所で行われていた可能性がある。往時の地形が如何なるものであったのかは検討の余地もあるが、築城にあたっては、自然地形を最大限に活かし、かつ当時の最新技術をもって台地を整形し、基礎を築いていたことが窺われよう。

弥生時代後期から古墳時代前葉の土器の出土から

今回の調査区からは、弥生土器や古墳時代の上師器も出土している。概して古城公園内において展開された歴史的様相を説くにつけては、戦国期から近世、もしくは縄文時代のそれについて語られることが多かったが、今回の成果は、その対象の拡張を意味することとなる。

遺物番号2001は弥生時代後期における壺の頸部もしくは器台の脚部から脚台部の部分と思われる。屈曲部には明確な段が設けられており、幅2mmから4mm間隔で刻み目が施されている。出土地は第9トレンチである。

遺物番号2002は、口径15.6cm、最大器高0.9cmをのこす古墳時代前葉の壺である。確認される範囲内においてはナデによって最終的な調整が行われている。遺物番号2003は、口径24.9cm、最大器高4.8cmをのこす上記と同じ時期の壺である。口縁部は二重口縁を呈し、やや外反する傾向がみえる。確認される範囲ではナデによって最終的な調整がなされている。遺物番号2002と同様に第2トレンチ東からの出土である。



図3. 弥生時代後期から古墳時代前葉の土器（縮尺1/3）

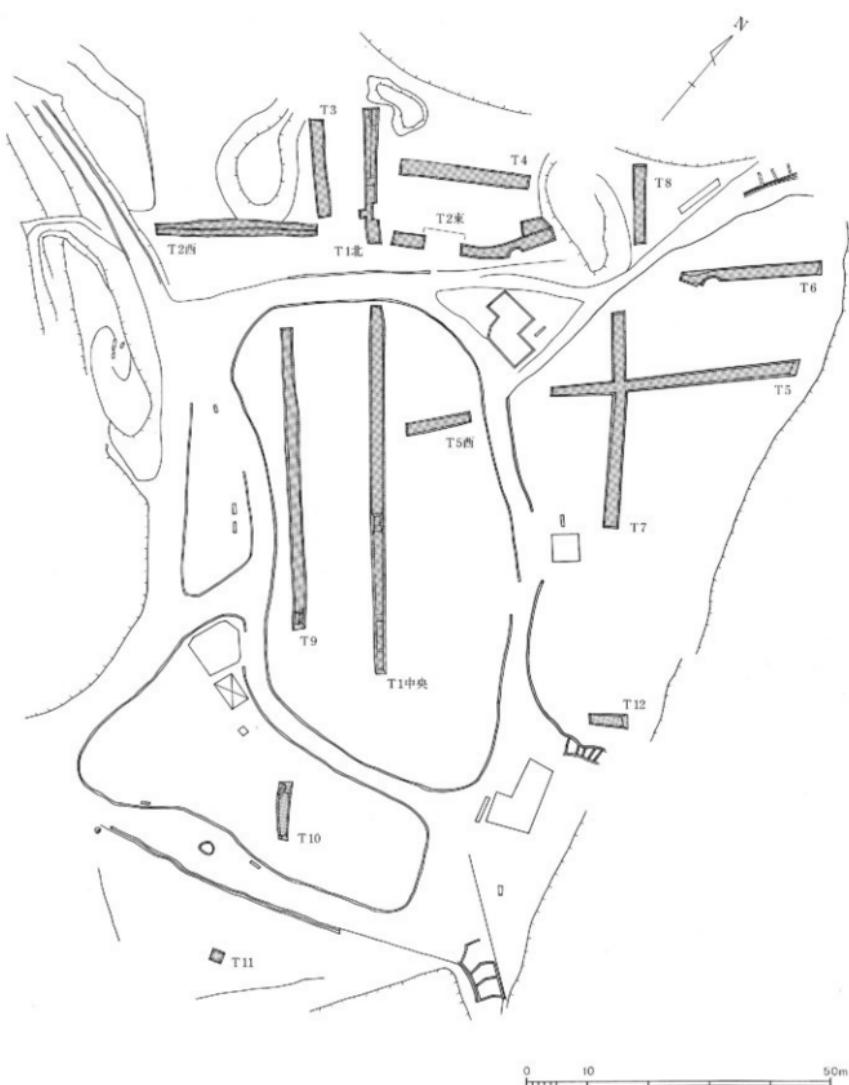


図4. トレンチ配置図 (縮尺 1/800)

出土遺物（縄文時代）

平成4年度の調査区からは、縄文土器をはじめ、前述した弥生時代後期から古墳時代前葉の上器や、近世の陶磁器類なども出土している。このうち圧倒数をしめるのは縄文土器であるが、本項では縄文時代の遺物について簡略に述べていくこととしたい。

なお、縄文土器については別途観察表にて個々の観察をまとめているので、合わせて参照されたい。
縄文土器（図版301～316他）

今回の調査では縄文中期後葉から後期後葉頃までの縄文土器が出土しているかと思われる。これを型式別に分類してその出土量を比較するならば、縄文後期前葉に比定される氣屋式の出土量が最も多く、次いで中期後葉の串田新式がこれに続く格好となる。

縄文土器については、高岡城の築城時に形成された整地層の下位に堆積する包含層から多くが出土した。今回は試掘調査であったこともあり、縄文土器の分布状況や接合状況などを詳細に把握することまではできなかったが、なかには多数の破片が接合したものもあったことから、縄文時代の遺物や遺構については比較的良好な状態で地中に包含されている地点もあるかと思われる。

打製石斧（図版317他）

当調査区にあっては4点の打製石斧が出土している。遺物番号3001は第1トレンチ北から出土した蛇紋岩製のそれである。上部を欠損しているが、往時は分銅形を呈していたと思われる。現状においては全長9.1cm、最大幅6.3cm、最大器厚3.3cmの規格を有する。

遺物番号3002は、第2トレンチ東から出土した砂岩製の打製石斧である。下部を欠損しているが、現状においては全長10.0cm、最大幅4.8cm、最大器厚3.4cmの規格を有している。遺物番号3003は、第2トレンチ西から出土した砂岩製とみられる打製石斧である。全長8.6cm、最大幅5.0cm、最大器厚1.8cmの規格を有する。こちらも上部を欠損しているが、他の石斧に比べてやや軟質な石材を使用しているためか、欠損及び磨耗が著しい。

遺物番号3004は、第2トレンチ東から出土した全長12.0cm、幅5.1cmを呈する安山岩製の打製石斧である。ほぼ完形であるが、原面が多く残存しており、かつ最大器厚も1.3cmにすぎないなど、他と比較してもやや異質なつくりをしている。

磨製石斧（図版317他）

当調査区からは3点の磨製石斧が出土している。このうちの遺物番号3005とした砂岩製ものは、欠損により辛うじて磨製石斧であることが確認されるのみであった。遺物番号3006は蛇紋岩製の磨製石斧である。こちらも上部を欠損しているが、現状で全長7.6cm、最大幅4.7cm、最大器厚2.3cmという規格をもつ。平面形状は中央部がやや外側に張る方状を呈し、最大幅及び最大器厚に達する部分も、それぞれ刃部より2.7cmと5.9cmほど上位にくる。第1トレンチ北から出土した。

遺物番号3007は蛇紋岩製の磨製石斧である。上部を欠損しているものの、現状では全長6.4cm、最大幅5.8cmの規格を有する。平面の形状は下方に向かうにしたがって擴広がりとなっており、最大幅も刃部の付近にきている。断面形は長楕円形を呈し、刃部はゆるく外湾する。第1トレンチ北から出土した。

磨石又は敲石（図版318）

当調査区からは、磨石及び敲石と考えよいものが4点出土している。遺物番号3008については、全長11.3cm、最大幅9.2cm、最大器厚5.8cmを呈する花崗岩製のものである。ほぼ全面的に表面が磨耗されている。第2トレンチ東から出土した。

遺物番号3009は、全長9.9cm、最大幅6.4cm、最大器厚1.9cmを呈する砂岩製のものである。全面にわたって表面が磨耗されている。遺物番号3010は全長10.1cm、最大幅7.7cm、最大器厚3.2cmを呈する砂岩製のものである。上述の3008と同様、表面が磨耗されているため磨石として使用したことが窺われるが、敲打器として使用されていた可能性を否定することはできない。第3トレンチ北から出土した。

遺物番号3011は、全長12.8cm、最大幅7.8cm、最大器厚3.9cmを呈する砂岩製のものである。第2トレンチ東から出土した。

凹石（図版318）

当調査区からは、確認される範囲では2点だけ凹石と判断しうるものが出土している。遺物番号3012は、全長11.4cm、最大幅6.4cm、最大器厚2.9cmの規格を呈する砂岩の礫の両面に、それぞれ2箇所ずつ凹みを有するものである。凹みの部分については必ずしも整円形を呈してはいない。第1トレンチ北から出土した。

一方の遺物番号3013は、片側を欠損しているものの、現状においては全長11.4cm、最大幅8.7cm、最大器厚6.2cmという規格を有する。片面に1箇所の凹みが見受けられる。第1トレンチから出土した。

石錐（図版319他）

当調査区からは6点の石錐が出土している。遺物番号3014は砂岩の原縁を菱形ないし六角形に近いかたちに成形し、その長軸側の両端に切口が設けられているものである。長軸10.6cm、最大幅5.8cm、最大器厚1.7cmを呈している。断面形は扁平な長楕円形を呈する。第2トレンチ西から出土した。

遺物番号3015については、砾岩の原縁を扁平かつ円形に成形し、両端に切口を設けるものである。全長8.1cm、最大幅6.9cm、器厚はほぼ均一に1.1cmを呈する。第2トレンチ西から出土した。遺物番号3016は、安山岩の礫の両端に切口を設けたものである。全長7.9cm、最大幅5.1cm、最大器厚は2.4cmを呈する。断面形は長楕円形を呈する。第2トレンチ西から出土した。

遺物番号3018は砾岩製の石錐である。片側の一部を欠損しているとみられるが、基本的には全体を楕円形に成形し、その長軸方向の両端に敲打による糸掛けを受けたものである。全長7.0cm、最大軸5.1cm、最大器厚1.6cmという規格を有する。断面形は長楕円形を呈する。第9トレンチから出土した。遺物番号3019は砾岩製の石錐である。上述の3018と同様のつくりであるが、全長7.1cm、最大幅6.4cm、最大器厚は2.1cmを呈しており、こちらはやや円形にちかい平面形状をもつ。断面形は長楕円形を呈する。第9トレンチから出土した。

そして遺物番号3017については、全長7.0cm、最大幅4.7cm、最大器厚は2.0cmを呈する砂岩製の石錐である。上述した他の石錐とはつくりが相違し、こちらは短軸方向の両端に敲打による糸掛けが設けられている。第9トレンチから出土した。

石錐（図版319）

当調査区においては、1点だけではあるが打製の石錐も出土している。全長26mm、最大幅15mmを呈する無頭の三角形錐である。材質は安山岩とみられる。



図5. 縄文土器実測図(1) 縄文中期後葉

縮尺1/3

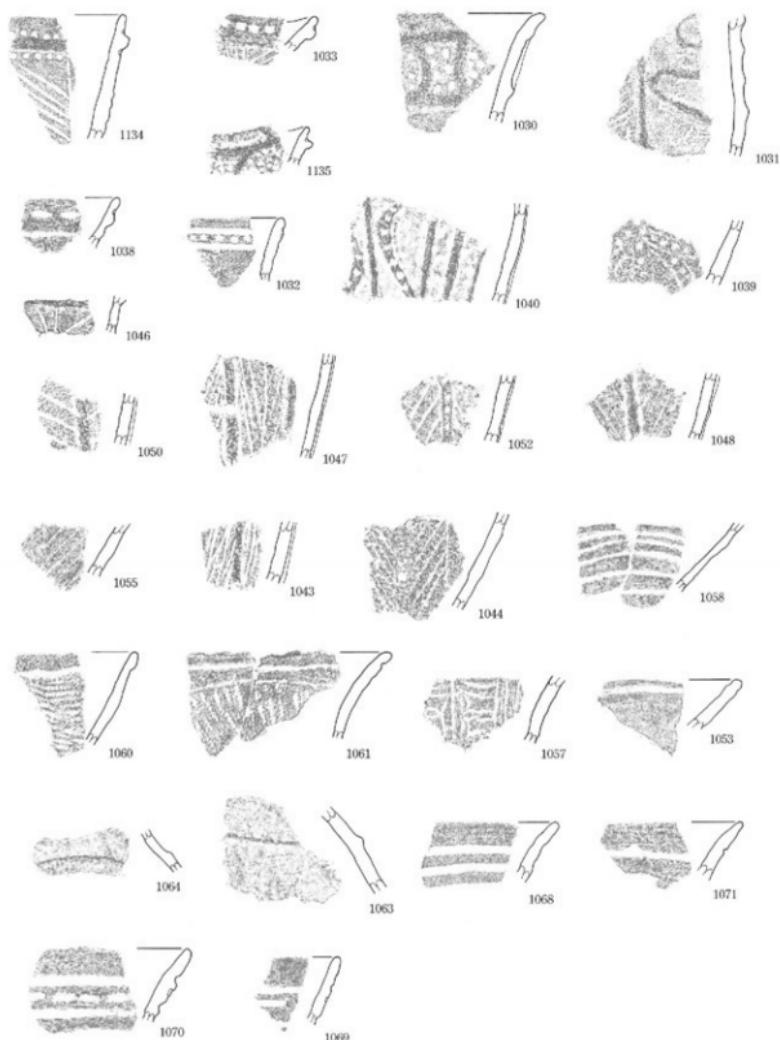


図 6. 縄文土器実測図(2) 縄文中期後葉～後期初頭

縮尺 1 / 3



図7. 縄文土器実測図(3) 縄文後期前葉

縮尺1/3



図8. 純文土器実測図(4) 純文後期前葉

縮尺1/3



図9. 縄文土器実測図(5) 縄文後期中頃ほか

縮尺1/3

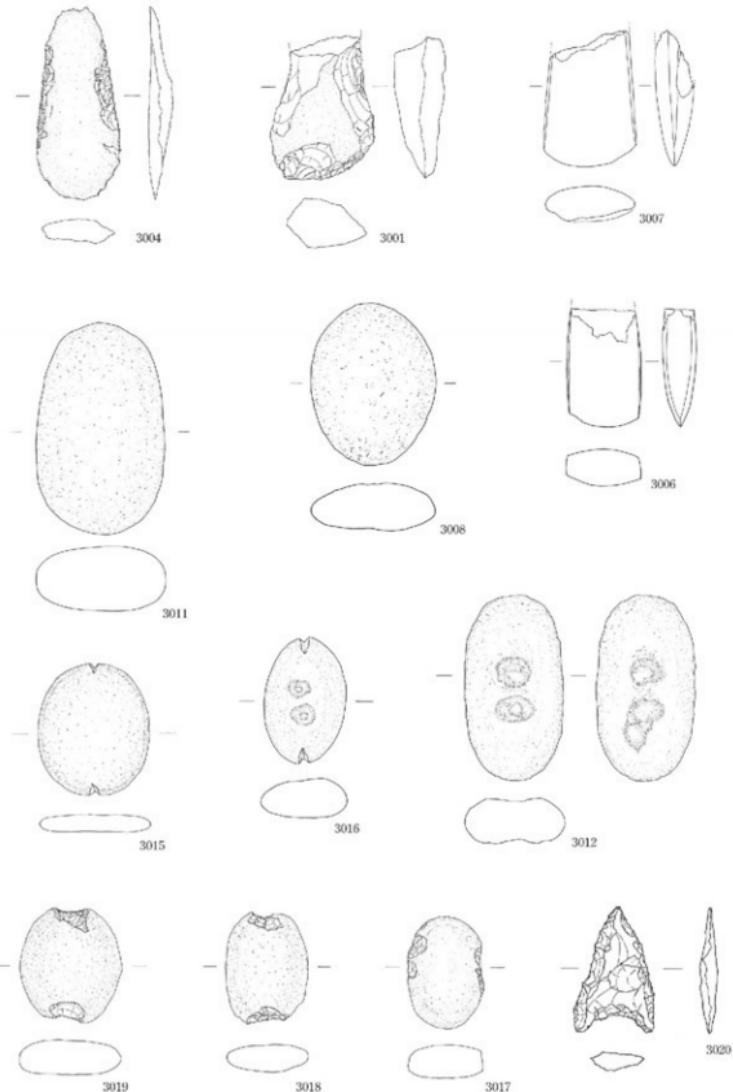


図10. 石器実測図 (打製石斧, 磨製石斧, 磨石又は敲石, 石錐, 凹石, 石錘)
3020のみ縮尺 1/1, 他は全て 1/3

表1. 繩文土器觀察表

番号	型式・器種・部位・文様・形状・現状・出土地点
1001	串田新II式 鉢 脚部 隆帯上に貝殻模様文 平行沈線 表採
1002	串田新II式 鉢 脚部 隆帯上に貝殻模様文 平行沈線 表採 100と同一個体か?
1003	串田新II式 深鉢 口縁部 座帯 隆帯上に貝殻模様文 内面にU唇部に沿うとみられる2条の沈線 第2トレンチ東出土
1004	串田新II式 深鉢 II縁部 肩帯 沈線 隆帯上に貝殻模様文 J字状文 第2トレンチ東出土
1005	串田新II式 深鉢 II縁部 座帯 貝殻模様文 第1トレンチ北出土
1006	串田新II式 深鉢 II縁部 座帯 異文帶上及び口唇部付近に貝殻模様文 縦仪の条線 内面のU唇部付近に沈線 第1トレンチ北出土
1007	串田新II式 深鉢 II縁部 から頸部 隆帯に隆帯 沈線上に貝殻模様文 第2トレンチ東出土
1008	串田新II式 深鉢 II縁部 手刊 沈線 口唇部付近に貝殻模様文 第2トレンチ東出土
1009	串田新II式 深鉢 II縁部 座帯 異文帶の下方に点文及び穿孔 U唇部付近が肥高。第2トレンチ東出土
1010	串田新II式 深鉢 II縁部 座帯 流瀬 第2トレンチ東出土
1011	串田新II式 深鉢 II縁部 平行沈線 沈線間に斜めの短沈線 第2トレンチ東出土
1012	串田新II式 深鉢 II縁部 附近 異文帶 異文帶 第2トレンチ東出土 異文帶らしい
1013	串田新II式 深鉢 II縁部 内面にU唇部に沿う流瀬 第2トレンチ東出土
1014	串田新II式 深鉢 II縁部 流瀬 異文 第2トレンチ東出土
1015	串田新II式 深鉢 II縁部 流瀬 隆帯ヒに刻み 異文状文 表採
1016	串田新II式 深鉢 II縁部 流瀬 隆帯 第2トレンチ東出土
1017	串田新II式 深鉢 II縁部 座帯 異文 第2トレンチ東出土
1018	串田新II式 深鉢 II縁部 突起 外面に口状沈線文及び降唇 内面に円形刺突文及び2条の平行沈線 第9トレンチ出土
1019	串田新II式 深鉢 II縁部 頸部付近 座帯 異文状文 第2トレンチ東出土
1020	串田新II式 深鉢 II縁部 座帯 第1トレンチ北出土
1021	串田新II式 深鉢 II縁部 頸部付近 座帯 沈線 第2トレンチ東出土
1022	串田新II式 深鉢 II縁部 一部脚 隆帯 U貝殻模様による印引き文 沈線 第2トレンチ東出土
1023	串田新II式 深鉢 II縁部 頸部 頸位の平行沈線 隆帯ヒに貝殻模様文 降唇間に瓶位の短沈線 第9トレンチ出土
1024	串田新II式 深鉢 II縁部 頸部 座帯 第2トレンチ東出土
1025	串田新II式 深鉢 II縁部 頸部 降唇に刻み 沈線 第2トレンチ東出土
1026	串田新II式 深鉢 II縁部 頸部 平行座帯 隆帯ヒに貝殻模様文 隆帯間に瓶位の短沈線 第1トレンチ北出土
1027	串田新II式 深鉢 II縁部 頸部付近 異文状文 隆帯ヒに刻み 第2トレンチ東出土
1028	串田新II式 深鉢 II縁部 座帯 隆帯ヒに刻み 表採
1029	串田新II式 深鉢 II縁部 座帯 隆帯による区画 第2トレンチ東出土 上唇丸らしい
1030	串田新II式 深鉢 II縁部 から頸部 降唇 隆帯ヒに列点文 斜りトレンチ出土
1031	串田新II式 深鉢 II縁部 降唇 異文状文 第2トレンチ東出土
1032	串田新II式 深鉢 II縁部 座帯 沈線間に列点文 第2トレンチ東出土
1033	串田新II式 深鉢 II縁部 列点文 座帯 異文状文 第9トレンチ出土
1034	串田新II式 深鉢 II縁部 座帯 異文状文 隆帯ヒの上方向に列点文 第2トレンチ東出土
1035	串田新II式 深鉢 II縁部 座帯 削突文 第9トレンチ出土
1036	串田新II式 深鉢 II縁部 頸部付近 座帯 異文状文 半載竹管状の連続刺突文 その下方を陰唇面に肥高さ。第2トレンチ西出土
1037	串田新II式 深鉢 II縁部 頸部 降唇による区画 隆帯ヒに刻み 第2トレンチ西出土
1038	串田新II式 深鉢 II縁部 降唇 椎位の短沈線 沈線 第3トレンチ東出土
1039	串田新II式 深鉢 朝部 平行沈線 沈線間に円形刺突文 第2トレンチ東出土
1040	串田新II式 深鉢 朝部 降唇 鮎行する隆帯ヒに列点文 第2トレンチ東出土
1041	串田新II式 深鉢 II縁部 降唇 座帯上に刻み 異文状文 第3トレンチ東出土
1042	串田新II式 深鉢 II縁部 降唇 隆帯ヒに刻み 第2トレンチ東出土
1043	串田新II式 深鉢 朝部 降唇 異文状文 第2トレンチ東出土
1044	串田新II式 深鉢 朝部 異文状文 第2トレンチ東出土
1045	串田新II式 深鉢 朝部 異文状文 第2トレンチ東出土
1046	串田新II式 深鉢 朝部 降唇 異文状文 第2トレンチ西出土
1047	串田新II式 深鉢 朝部 降唇 異文状文 第2トレンチ東出土
1048	串田新II式 深鉢 朝部 異文状文 降唇 隆帯ヒに斜押さえ 第2トレンチ東出土
1049	串田新II式 深鉢 朝部 降唇 隆帯ヒに刻み 列点文 沈線 第2トレンチ東出土
1050	串田新II式 深鉢 朝部 異文状文 降唇 異文帶らしい 第2トレンチ東出土
1051	串田新II式 深鉢 朝部付近 異文状文 降唇 椎位に肥高させた齊狀部分に刻文文 第9トレンチ出土
1052	串田新II式 深鉢 朝部 異文状文 降唇 隆帯ヒに円形刺突文 第2トレンチ東出土
1053	串田新II式 深鉢 II縁部 降唇 第2トレンチ東出土
1054	串田新II式? 若稚小明 朝部付近 ブリッジ 第9トレンチ出土
1055	串田新II式? 若稚小明 朝部 沈線 第2トレンチ東出土
1056	串田新II式 深鉢 降唇 降唇ヒに刻文 第2トレンチ東出土
1057	串田新II式 深鉢 朝部 沈線 第2トレンチ東出土 P.Sと河一體体か?
1058	串田新II式 深鉢 II縁部 沈線 第9トレンチ出土
1059	盤式不明 把手 第2トレンチ東出土
1060	串田新II式 深鉢 II縁部付近 座帯 沈線 第2トレンチ東出土

1061	串田新Ⅱ式	深鉢	口縁部	押し引き列点文	縦撰文	口唇部に指押さえ	第1トレンチ北出土
1062	串田新Ⅱ式?	把手	第2トレンチ東出土				
1063	串田新Ⅱ式	深鉢	脇部	微隆帯	第2トレンチ東出土		
1064	串田新Ⅱ式	深鉢	脇部	脇部から肩部	縦撰文	第2トレンチ東出土	
1065	串田新Ⅱ式?	把手	沈鉢	第2トレンチ東出土			
1066	前田式	鉢	脇部付近	薄	第2トレンチ東出土		
1067	前田式	~気泡式	鉢	口縁部	粘土貼り付け	第2トレンチ東出土	
1068	串田新式	深鉢	口縁部	平行弦線	表撰		
1069	前田式	深鉢	沈鉢	沈線区画間に列点文	第2トレンチ東出土		
1070	前田式	深鉢	口縁部	平行沈線	沈線間に列点文	第2トレンチ東出土	
1071	前田式	深鉢	口縁部	沈線	第2トレンチ西出土		
1072	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	胴半部	口唇部付近に刻み	沈線	沈線内に刻み 円形刺突文 隆帯 三角刺突文 縦撰文 第9トレンチ北出土
1073	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	外面	(円形刺突文, 沈線, 脣部の一部を肥厚さ)	内裏(外裏の正反対側に円形刺突文, 沈線)	第9トレンチ出土
1074	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	沈線	円形刺突文	三角刺突文	表撰 第2トレンチ東出土
1075	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	沈線	円形刺突文	表撰	
1076	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	沈線	円形刺突文	二角刺突文	表撰
1077	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	平行沈線	円形刺突文	二角刺突文	第9トレンチ出土
1078	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	内面	(円形刺突文, 沈線, 隆帶)	外裏は粗略により文様確認できず。	第2トレンチ西出土
1079	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	口唇部付近に刻み	平行沈線	口縁部を肥厚さ	第9トレンチ出土 E140と同一個体か?
1080	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	胴半部	沈線の端部に円形刺突文	現何学文	第9トレンチ出土
1081	気屋Ⅰ式	深鉢	沈線	第2トレンチ東出土			
1082	気屋Ⅰ式	深鉢	沈線	第2トレンチ東出土			
1083	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	通能三角刺突文	口唇部にかけて横文	第9トレンチ出土	
1084	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	内面に継続の平行沈線及び渦巻き文	外裏無文	第9トレンチ出土	
1085	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	通能三角刺突文	沈線 口唇部に刻み	第9トレンチ出土	
1086	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	平行沈線	口唇部に刻み	第2トレンチ東出土	
1087	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	二角刺突文	平行沈線	口縁部のみ	第9トレンチ出土
1088	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	円形刺突文	沈線	口縁部に残る	第9トレンチ出土
1089	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	隆帶	沈線	第2トレンチ東出土	
1090	気屋Ⅰ式	深鉢	頭部	円形刺突文	沈線 隆帯 刻み	第9トレンチ出土	
1091	気屋Ⅰ式	深鉢	頭部	円形刺突文	沈線 隆帯	隆帶上に刻み	縦撰文 半丸 第2トレンチ東出土
1092	気屋Ⅰ式	深鉢	頭部	頭部付近	沈線	第2トレンチ東出土	
1093	気屋Ⅰ式	深鉢	頭部	沈線	幾何学状の沈線	第1トレンチ北出土	
1094	気屋Ⅰ式	深鉢	頭部	沈線	短沈線	第9トレンチ出土	
1095	気屋Ⅰ式	深鉢	頭部付近	隆帶	隆帶上に二角文	沈線 縦文	第9トレンチ出土
1096	気屋Ⅰ式	深鉢	頭部	沈線	第2トレンチ東出土		
1097	気屋Ⅰ式	深鉢	頭部	沈線	第2トレンチ出土		
1098	気屋Ⅰ式	深鉢	頭部	沈線	渦巻文	第2トレンチ東出土	
1099	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	沈線	横状沈線	第9トレンチ出土	
1100	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	沈線	沈線	第2トレンチ東出土	
1101	気屋Ⅰ式	深鉢	頭部	沈線	第2トレンチ西出土		
1102	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	沈線	第2トレンチ東出土		
1103	気屋Ⅰ式	深鉢	頭部	沈線	第2トレンチ東出土		
1104	気屋Ⅰ式	深鉢	頭部	沈線	第2トレンチ東出土		
1105	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	沈線	第2トレンチ東出土		
1106	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	沈線	朱あり	第2トレンチ東出土	
1107	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	沈線	口縁部に波状沈線	二角刺突文	第2トレンチ東出土
1108	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	沈線	二角刺突文	波状沈線 縦文	第2トレンチ東出土
1109	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	沈線	波状沈線文	第2トレンチ東出土	
1110	気屋Ⅰ式	深鉢	頭部	波状沈線文	第2トレンチ東出土		
1111	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	波状沈線文	第2トレンチ東出土		
1112	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	口縁部押し引き文	第2トレンチ東出土		
1113	気屋Ⅰ式	深鉢	頭部	沈線	波状沈線	第9トレンチ出土	
1114	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	沈線	押し引き文	第2トレンチ東出土	
1115	気屋Ⅰ式	鉢	口縁部	平行沈線	表撰		
1116	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	沈線	刺突文	口縁部に刻み 椎状押引文	口縁部を肥厚さ
1117	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	平行沈線	沈線間に	椎状押引文	第2トレンチ東出土
1118	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	沈線	平行沈線	口縁部に刻み	第2トレンチ東出土
1119	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	沈線	沈線	第2トレンチ東出土	
1120	気屋Ⅰ式	深鉢	頭部	頭部から肩部	純文	平行沈線	第2トレンチ西出土
1121	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	沈線	第2トレンチ東出土		
1122	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	平行沈線	口唇部から口縁部にかけて横文	凹窓状の沈線	表撰
1123	気屋Ⅰ式	深鉢	口縁部	頭部	三角刺突文	縦撰文 表撰	

1124	気泡I式 深鉢	口縁部 平行双縫 口唇部から口縁部かけて割込み 第2トレンチ東出土
1125	気泡I式 深鉢	口縁部 平行沈縫 口唇部付近に縦文 表採
1126	気泡I式 深鉢	口縁部 平行北縫 縦文 第9トレンチ出土
1127	気泡I式 深鉢	隆背 三角刺突文 沈縫 第2トレンチ東出土
1128	気泡I式 深鉢	口縁部 隆背 沈縫 第2トレンチ東出土
1129	気泡I式 深鉢	口縁部 口唇部から口縁部にかけて縦文 押し引き文気味の三角刺突文 第9トレンチ出土
1130	気泡I式 深鉢	口縁部 口唇部から口縁部にかけて縦文 押し引き文 沈縫 第9トレンチ出土
1131	気泡I式 深鉢	口縁部 縦文 口唇部に押さえ 縫部付近に無文帯 第9トレンチ出土
1132	気泡I式 深鉢	口縁部 平行北縫 縦文 第9トレンチ出土
1133	気泡I式 深鉢	口縁部 沈縫文 磨消縦文 第9トレンチ出土
1134	気泡I式 深鉢	口縁部 縦文 圓窓に無文帯 第9トレンチ出土
1135	気泡II式 深鉢	沈縫 第9トレンチ出土
1136	気泡II式 深鉢	口縁部 沈縫 縦文 第2トレンチ東出土
1137	気泡II式 深鉢	口縁部 縦文 第9トレンチ出土
1138	気泡II式 深鉢	口縁部 平行北縫 磨消縦文 第9トレンチ出土
1139	気泡II式 深鉢	口縁部 平行沈縫 磨消縦文 第9トレンチ出土
1140	酒見式並行期 深鉢	胴部 平行沈縫 縦文 第9トレンチ出土
1141	酒見式並行期 鉢	胴上半部 塗消縦文 第1トレンチ北出土
1142	酒見式並行期 深鉢	頭部付近 平行沈縫 塗消縦文 第9トレンチ出土
1143	気泡式～加賀利B1式並行期	表面不明 口縁部から胴部？ 平行沈縫 塗消縦文 沈縫筋部に円形刺突文 第9トレンチ出土
1144	酒見式並行期 深鉢	胴部 平行沈縫 縦文 第2トレンチ東出土
1145	酒見式並行期 深鉢	胴部 平行北縫 縦文 第1トレンチ出土
1146	酒見式並行期 深鉢	胴部 平行沈縫 沈縫間に縦文 磨消縦文 第9トレンチ出土
1147	酒見式並行期 注口土器	口縁部 平行沈縫 斜背 陣帶上に刻み 第9トレンチ出土
1148	酒見式並行期 深鉢	胴部 平行沈縫 磨消縦文 第9トレンチ出土
1149	酒見式並行期 深鉢	胴部 塗消縫 文第9トレンチ出土
1150	加賀利B1式並行期	深鉢 口縁部 平行沈縫 第2トレンチ東出土
1151	加賀利B1並行期	深鉢 脇部 液巻文 第9トレンチ出土
1152	加賀利B1並行期	深鉢 脇部 条縫 第2トレンチ東出土
1153	加賀利B1式並行期	深鉢 脇部 沈縫 液巻き文 第2トレンチ東出土
1154	加賀利B1式並行期	深鉢 口縁部 外面基文 内面には口唇部に沿う沈縫 第9トレンチ出土
1155	加賀利B1式並行期	深鉢 脇部 条縫 第2トレンチ東出土
1156	加賀利B1式並行期	深鉢 脇部 沈縫 第2トレンチ東出土
1157	加賀利B1並行期	深鉢 脇部 売縫 口唇部に縦文 沈縫 内面に沈縫 表採
1158	加賀利B1式並行期	深鉢 口縁部 売縫 の平行沈縫 3字状文 工唇部に刻み 内面に3条の平行沈縫と円形刺突文 第1トレンチ北出土
1159	加賀利B1式並行期	深鉢 口縁部 売縫 第2トレンチ東出土
1160	後期後葉並行期	浅鉢 口縁部 肩部に刻み 四縫文 第9トレンチ出土
1161	型式不明 深鉢	口縁部から胴部 口縁部付近に平行沈縫 第2トレンチ東出土

※ 表中における文様の解説は、とくに断らないかぎり外側のそれをしめす。



ま　と　め

小竹藪遺跡における平成4年度の試掘調査概要を述べてきた。今回の調査については、調査面積が小さい割には比較的多くの出土遺物を得ることができた。出土遺物のほとんどは、縄文中期後葉から後期後葉頃までの縄文土器であるが、数量的には中期後葉から後期前葉までのものが圧倒数を占めている。ただし、小竹藪遺跡から北東へ400mほどの地点に位置する中川遺跡では、平成9年度の調査時に縄文晚期の土器群が検出されていることから、この周辺地域においては、大局的には長期間にわたって縄文時代の様相がひろがっていた可能性があるかと思われる。

なお、小竹藪遺跡については、縄文時代の遺跡としてひろく知れわってきたが、今回の調査区からは弥生時代後期から古墳時代前葉の土器も出土し、当該期の様相も所在した可能性が浮上している。このことは、周辺地域にかかる今後の研究に対しても一石を投ずるであろう。

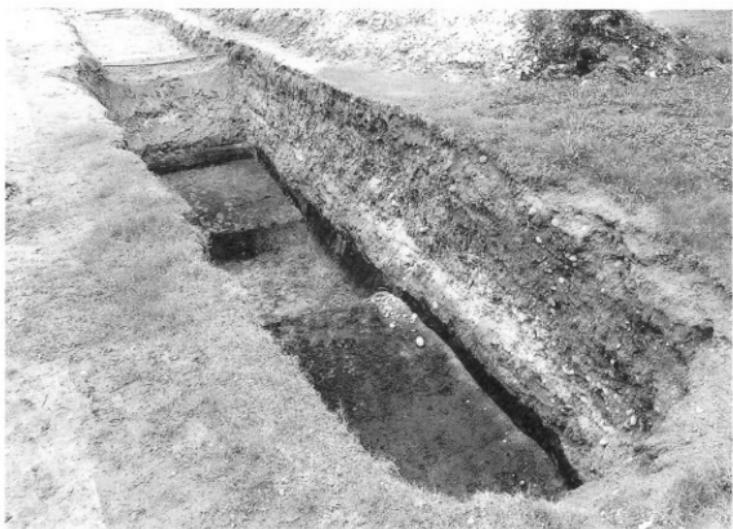
また、当地は江戸時代初頭においては高岡城が築かれた経緯をもつが、一部の試掘坑からは築城時のものと思われる整地層が確認されている。現状において同城の全てを掌握することは不可能であるが、調査件数が少なく、かつ関連する文献も希薄な高岡城にあっては、その片鱗を垣間見る資料が得られたという点で、意義深い成果であると思われる。

今回の調査成果をもって、小竹藪遺跡にかかるすべての様相を把握することまでは困難であるが、その点については、今後も詳細な調査を重ねていくことによって徐々に明らかになっていくであろう。ただし、今後は縄文時代だけではなく、他の時代の様相などにも注意をはらい、多角的な視野から同遺跡への検討をすすめていく必要があるものと考える次第である。

【参考文献】

- 高岡市教育委員会 『高岡城遺跡調査概報－平成7年度、送水管地区、三の丸茶屋地区の調査－』 1997
高岡市教育委員会 『高岡公園小竹藪縄文遺跡』 1964
能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団 『石川県能都町 真脇遺跡
－農村基盤総合整備事業能都東地区真脇工区に係る発掘調査報告書－』

図 版



図版 201. 第 1 トレンチ土層断面



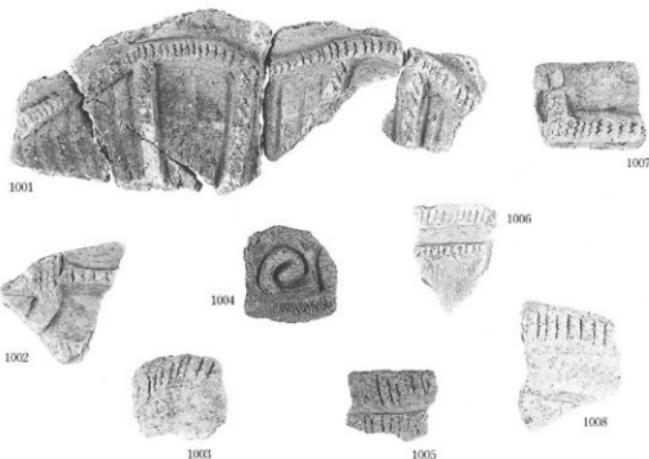
図版 202. 第 1 トレンチ土層断面（中央部）



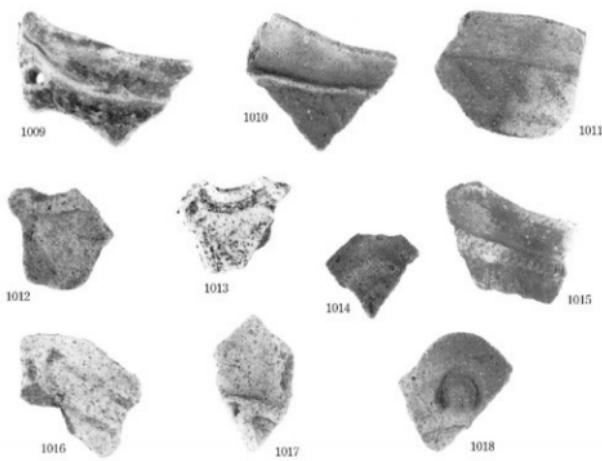
図版 203. 第 9 トレンチ土層断面



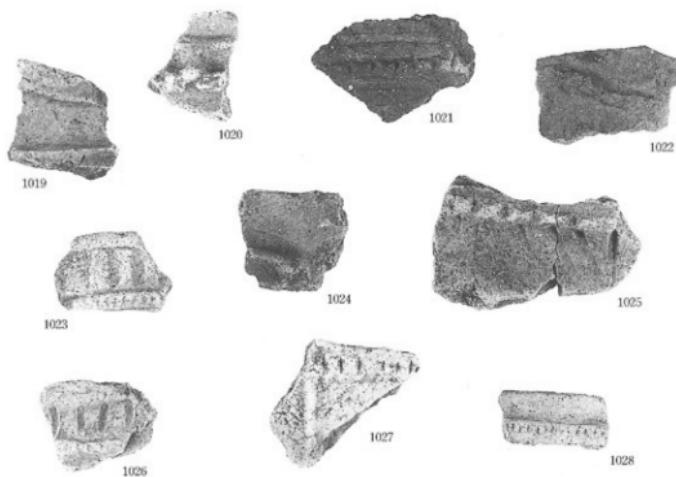
図版 204. 第 9 トレンチ土層断面（南東側先端部）



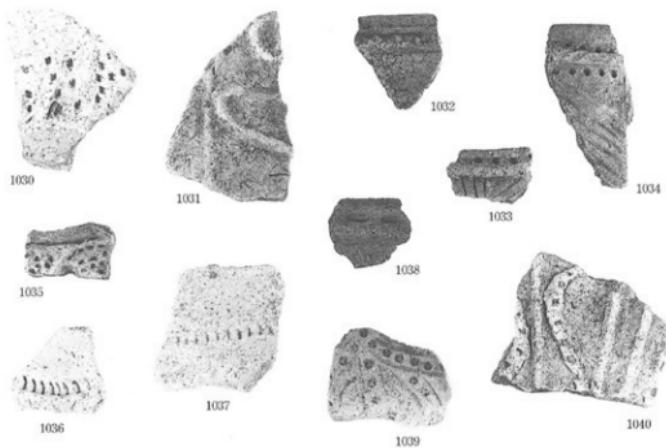
図版 301. 繩文土器（中期後葉）



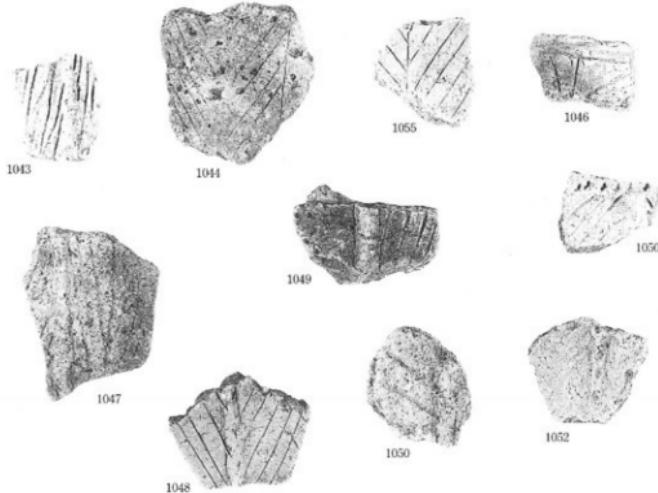
図版 302. 繩文土器（中期後葉）



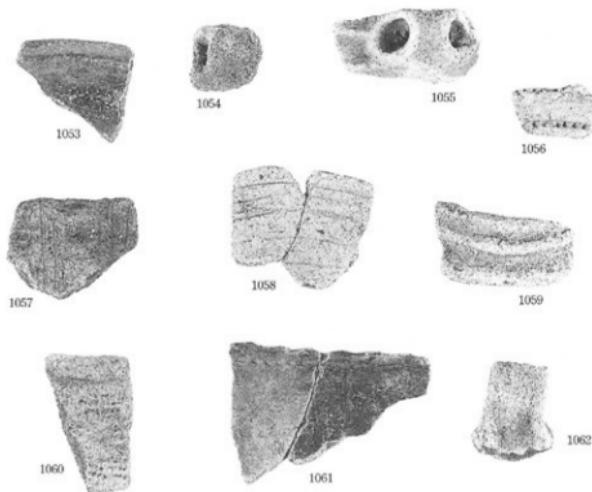
図版 303. 繩文土器（中期後葉）



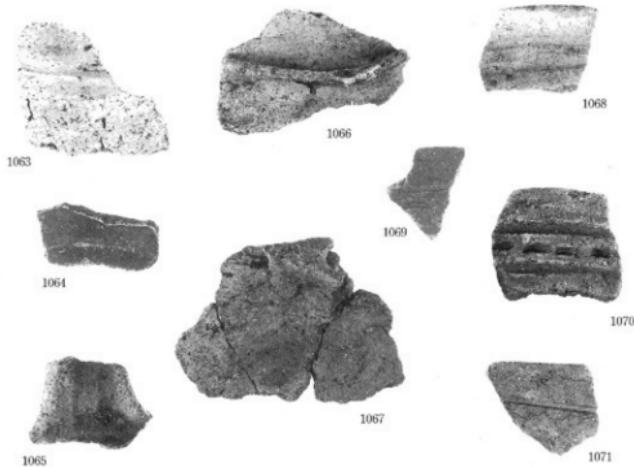
図版 304. 繩文土器（中期後葉）



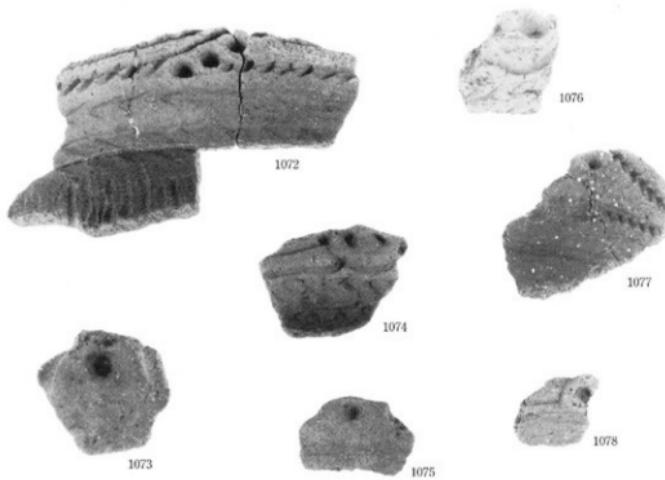
図版 305. 繩文土器（中期後葉）



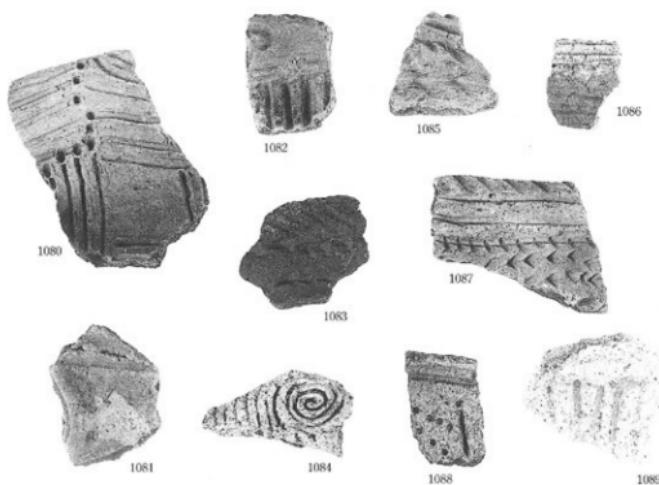
図版 306. 繩文土器（中期後葉）



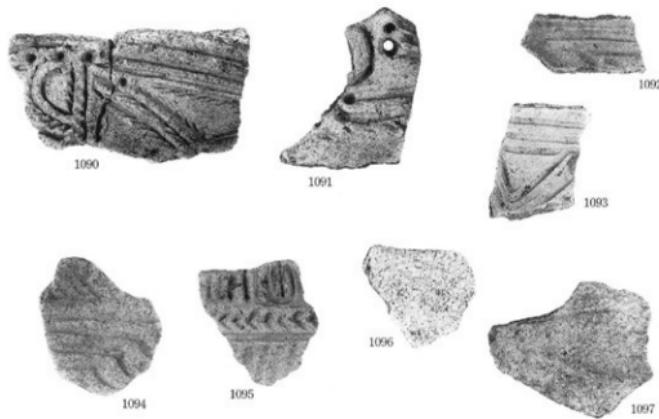
図版 307. 縄文土器（中期後葉～後期初頭）



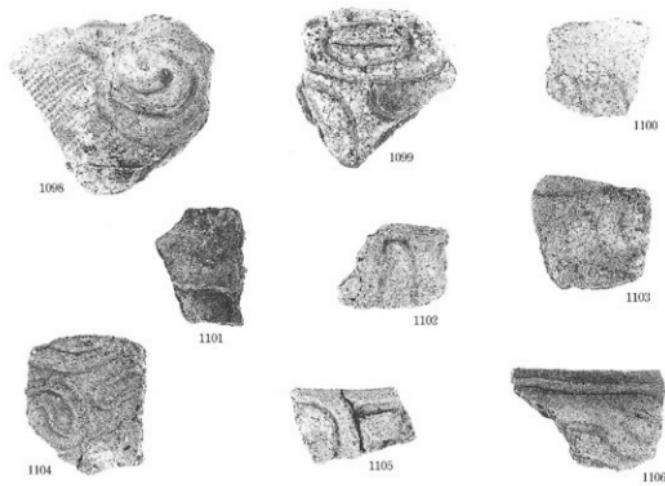
図版 308. 縄文土器（後期前葉）



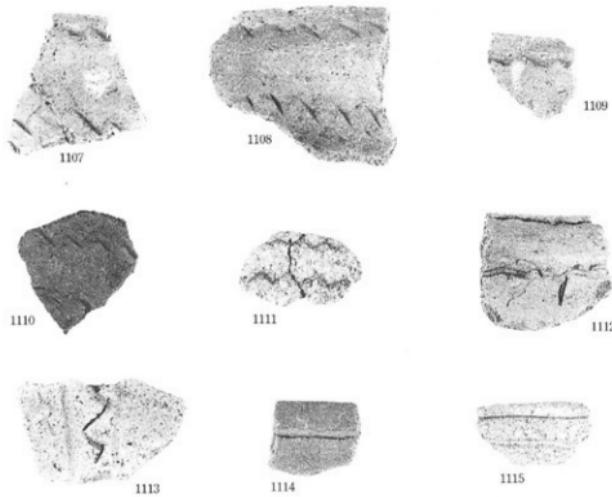
図版 309. 繩文土器（後期前葉）



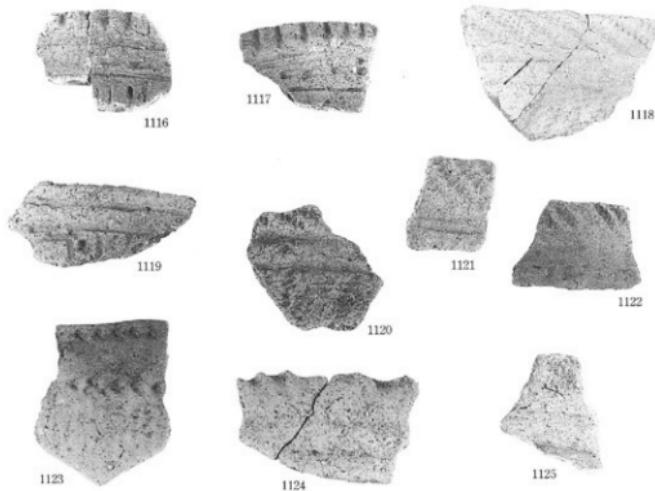
図版 310. 繩文土器（後期前葉）



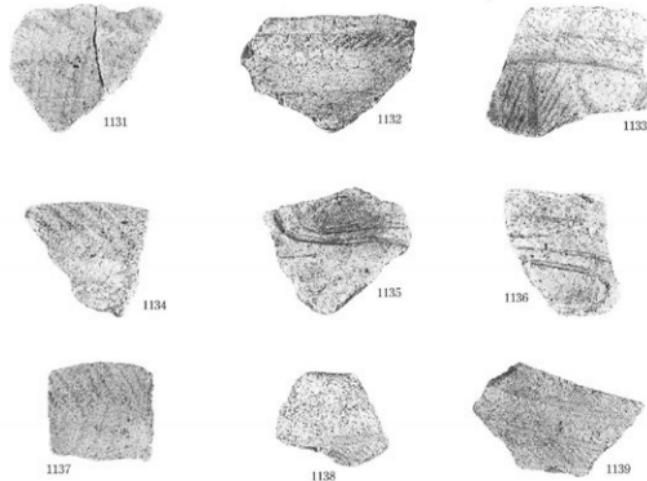
図版 311. 繩文土器（後期前葉）



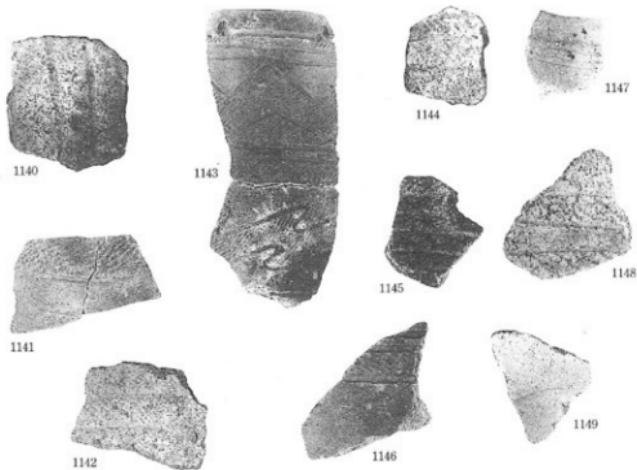
図版 312. 繩文土器（後期前葉）



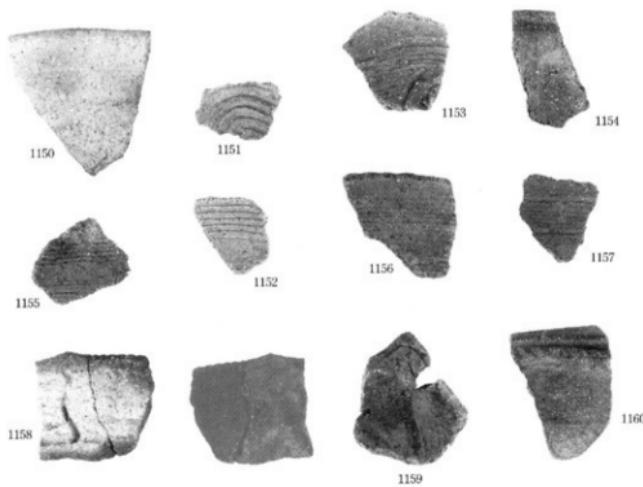
図版 313. 繩文土器（後期前葉）



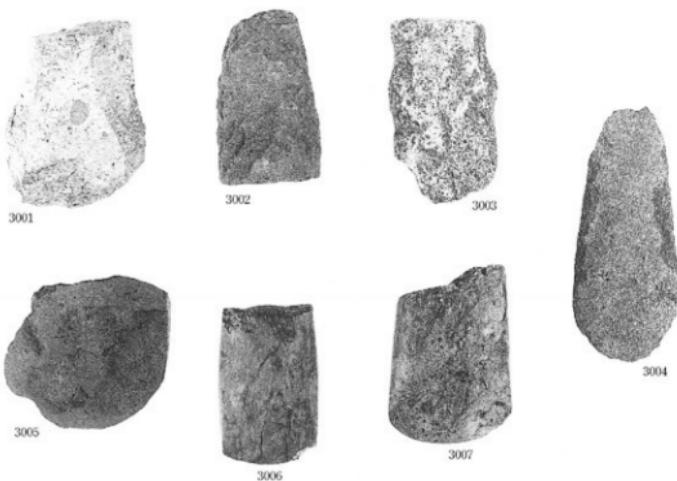
図版 314. 繩文土器（後期前葉）



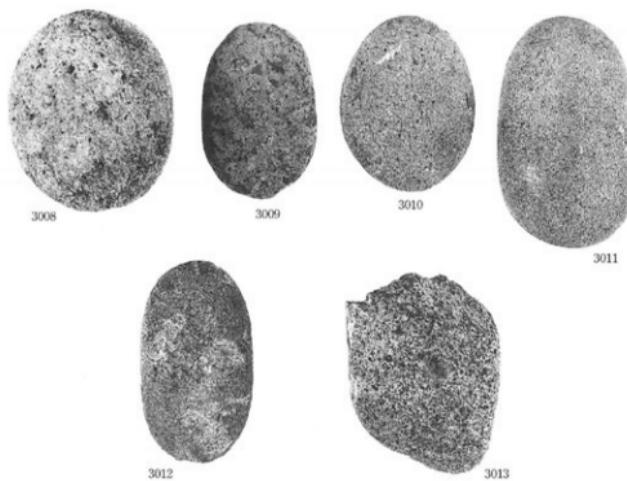
図版 315. 繩文土器（後期前葉～中頃）



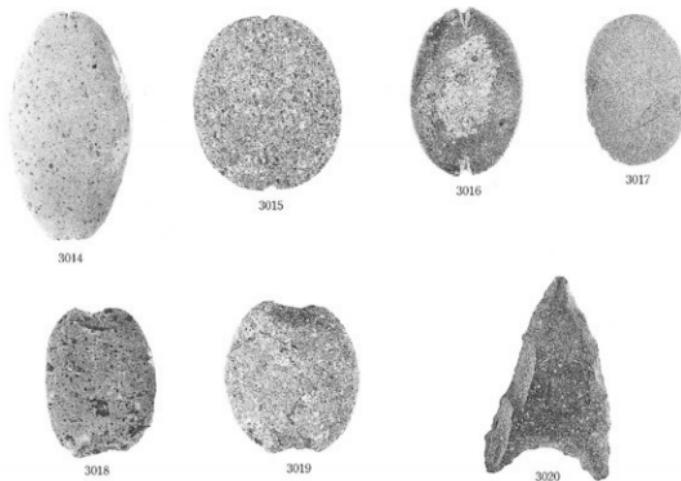
図版 316. 繩文土器（後期中頃）



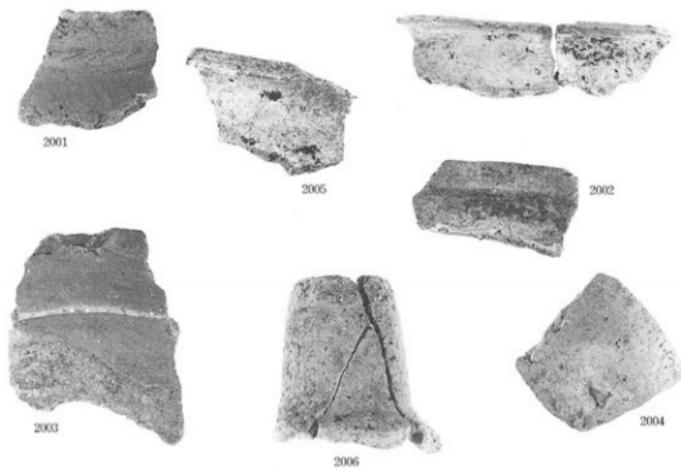
図版 317. 打製石斧・磨製石斧



図版 318. 研石又は敲石・凹石



図版 319. 石錘・石鎌



図版 320. 弥生土器・土師器



図版 401. 遺物出土状況 (3003)



図版 402. 遺物出土状況 (3007)



図版 403. 遺物出土状況 (3015)



図版 404. 調査風景



図版 405. 調査風景



図版 406. 調査風景

報告書抄録

ふりがな	おたけやぶいせき ちょうさがいほう							
書名	小竹戻遺跡 調査概報							
副書名	高岡古城公園の整備にともなう試掘調査							
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査概報							
シリーズ番号	第51冊							
編集者名	根津 明義							
調査担当者	山口 辰一							
編集機関	高岡市教育委員会							
所在地	〒933-8601 富山県高岡市広小路7番50号 TEL 0766-20-1463							
発行年月日	西暦2003年3月28日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小竹戻遺跡	富山県 高岡市 古城	01602	202135	36° 44' 52"	137° 1' 35"	19920803 ~ 19920828	718m ²	公園整備
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
小竹戻遺跡	集落 城館	繩文中期後葉～後 期後葉、近世	城郭造営時の基礎 整地層			縄文土器、弥生土器、十師器、近世陶 磁器類、打製石斧、磨製石斧、土鍤、 石鍤、磨石又は敲石、凹石、石鐵		

高岡市埋蔵文化財調査概報 第51冊

小竹戻遺跡 調査概報

—高岡古城公園の整備にともなう試掘調査—

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7番50号

2003年3月28日

印刷所 小間印刷株式会社

富山県高岡市利原町3

